

学籍番号 : 14523003	氏名 : 多田雄治郎
学部学科名 : 生物産業学研究科 北方圏農学専攻	
留学先学校名 : 中国農業大学	
1. 留学の目的	
2.	
留学中の目標としては、①修士論文について王庆剛副教授からアドバイスや指導を受けること ②機会があれば自分の専門に関連する学会（中国森林学会など）に参加すること ③実践的なコミュニケーション能力を向上させること、の3点が挙げられます。	
① 修士論文について	
留学に行く前に、できる限り修士論文を進めました。中国農業大学に留学してからは、王庆剛副教授のお力添えもあり、ゼミなどの学内で修士論文の発表をさせていただきました。初回のゼミに参加した時には、ほぼ全員初対面の中、中国語で発表するのは非常に緊張しましたが、何とか乗り越えることができました。王庆剛副教授や中国農業大学の学生たちから多くのアドバイスをいただき、コミュニケーションを通じて自分の論文の不備に気づくことができました。その結果、修士論文をより良いものにすると感じました。	
また、中国農業大学の研究室を訪れ、フィールド調査についていくことによって、留学先の学生の調査や研究に参加することを目標としていましたが、留学時期には調査がすでに終了しており、教授も生徒も忙しかったため、この願いは叶いませんでした。しかし、12月上旬に王庆剛副教授が私のためにハイキングを企画してくださいました。当時は北京市北西部に位置する香山を登りました。北京は一年中雨が少なく、植生があまり大きく成長しないのが特徴です。北京の典型的な植生や環境を実際に見ることができ、とても新鮮で印象的でした。	
② 学会について	
2024年3月に東京農業大学世田谷キャンパスで開催された日本森林学会大会に参加し、修士論文のポスター発表を行いました。学会では来場者の方々から多くの貴重なご意見をいただき、自分の研究の至らなさを痛感しました。この経験を通じて、留学中に中国で開催される学会（例えば中国林学会など）に参加し、他の研究者や参加者と交流することで自分の知見を広げることを目的としました。王庆剛副教授の協力を得て、11月に武漢華中農業大学で開催された中国林学会に参加することができました。私はこの学会で発表はせず、参加者として様々な研究者の研究を聞くことができました。多くの研究の中には、私の論文と近い内容のものもあれば、全く知らなかった斬新な方法を利用したものもあり、非常に興味深いと感じました。	
③ 実践的なコミュニケーション能力について	
様々な生活環境に身を置き、異なる言語や文化に触れ、多くの人々とコミュニケーションをとることで、私はコミュニケーション能力を向上させ、視野を広げたいと考えていました。留学生寮での数か月間、インドネシアやアフリカ、韓国など、様々な国籍の方々と出会うことができました。自分のコミュニケーション能力を向上させるために、積極的に彼らに挨拶し、コミュニケーションを図りました。彼ら	

は皆、英語が流暢であるため、ついていけないこともあります。翻訳アプリを使用して会話をすることが多かったです。これからも英語の勉強を頑張りたいと感じました。ちなみに、中国語に関しては私の方が上手だったので、彼らの中国語に関する問題を解決する手助けをすることもありました。このような経験を通じて、留学期間中に異なる文化や言語に触れ合うことができました。留学生以外にも、現地の中国人学生とよくコミュニケーションをとっていました。中でも、とても仲の良い友人に出会うことができました。今回の留学まで、5~6年間中国に行っていなかつたため、中国語の実力も落ちていましたが、彼らのおかげで留学後は中国語の実力も回復したと感じています。

## 2. 現地での生活について

(住居、キャンパス、友達との交流、余暇の過ごし方など)

寮は2人部屋で、私は同じ東京農業大学の宋天宇さんと一緒に半年間生活しました。同じ大学の生徒であり、留学前にも面識があったため、性格も合い、留学中は特に揉めることもなく楽しく過ごせました。寮では、基本的に各自やりたいことをやり、お互いに迷惑をかけることはほとんどありませんでした。寮の部屋の広さはちょうどよく、各自の机とベッド、バスルーム、トイレ、ベランダがついていました。ベッドシートが少し汚かったことと、シャワーの湯沸かしが少し遅かったこと以外は、基本的に不満な点はありませんでした。北京は冬季には北海道並みに寒くなりますが、寮の中には暖房があり、寒さを感じることはませんでした。私と宋くんはたまに一緒に出掛けることがあり、中国の建国記念日の前の週には秦皇岛に3泊4日の旅行に行きました。当時は二人とも授業がなく、社会人たちは仕事をしていたため、観光地も混んでおらず、快適でした。

11月上旬に、東京農業大学の同じ研究室の後輩が北京に会いに来てくれました。その後輩と一緒に北京の有名な観光地を巡り、美味しい中華料理を楽しみました。中でも特に印象に残ったのは、万里の長城、故宮、そして北京ダックでした。万里の長城は想像以上に壮大で、当時風が強く、登るのは大変でしたが、頂上からの景色は素晴らしいかったです。故宮は非常に混雑しており、全ての建物を見るために5時間近く歩き回りました。本場の北京ダックは皮がパリッとしていて、最高に美味しかったです。

また、宋くん以外にも研究室で気の合う友人が何人かできました。特に、许宇凡という方と仲良くなり、彼は非常に熱心で、私が初めてゼミで発表した際に話しかけてくれました。それがきっかけで、何でも話せるような関係になりました。12月上旬に、许宇凡さんが母校の瀋陽農業大学に用事があり、私も一緒について行きました。瀋陽農業大学は非常に大きく、生活環境も整っていました。瀋陽農業大学以外にも、瀋陽故宮や張氏帥府などの有名な観光地を訪れました。瀋陽は北京ほど発展していませんが、物価が非常に安く、2人で外食をしてお腹いっぱい食べても2000円を超えることはありませんでした。もし今後、中国に行く機会があれば、瀋陽で生活してみたいと思いました。

### 3. 留学を通じて学んだこと

留学中に最もやりがいを感じたのは、修士論文を進めたことです。多くの人の前で修士論文を発表し、お互いに意見を交換し、貴重なアドバイスをいただくことができました。東京農業大学では、このような発表の機会は年に2、3回と少ないですが、留学先では毎週ゼミが開催され、何度も発表することができました。そのおかげで、発表力や説明の仕方、問題発見力などが磨かれたと感じます。中国農業大学の生徒は非常に真面目で、一人ひとりが数えきれないほどの文献を読み、修士課程の学生でも学術誌に論文を発表している人が多く、見習うべき点が多かったです。このような勉強は彼らに大きなプレッシャーを与えていたかもしれません、彼らは私よりもはるかに多くの知識を持っていると感じました。私にもできるかどうかわかりませんが、彼らを見習い、卒業する前に私も多くの論文を読み、自分の論文も発表されるように頑張りたいと思います。

また、新しい友人を作ることは、私にとって非常に実りのあることだと感じます。留学期間中、学業を優先して過ごしましたが、運良く現地の人々と知り合うことができ、彼らの勉強や生活の経験を学び、中国の伝統文化を体験することもできました。日本人はとても礼儀正しくルールを守りますが、少し冷たく感じることもあります。一方で、中国人はルールをあまり守らない人もいますが、全体的に熱心でオープンマインドであり、話し合いやすいと感じました。

### 4. 留学経験を今後どのように活かしていきたいか

留学中には、専門的な知識や発表のコツなど、多くのことを学びました。卒業までの残り半年間、学んだことを活かして修士論文を作成し、無事に卒業できるよう頑張ります。さらには、発表できるような論文を書けたら尚更良いと思います。留学を通じて私は、勉強面で成長しただけでなく、異文化コミュニケーション、チームワーク、問題解決能力など、多くの実践的なスキルを身につけることができたと感じています。将来はこれらのスキルを仕事にも応用し、効率を高めたいと思っています。また、多国籍企業や国際的な事業を展開する企業で機会を見つけ、海外で得た経験や人脈を活かして会社の発展に寄与し、個人的なキャリア目標を達成したいと考えています。

留学と海外生活の経験を通じて、私はより自立し、自信を持ち、問題や課題にうまく対処する方法を学ぶことができました。この個人的な成長は、キャリアに良い影響を与えるだけでなく、人生を充実にしてくれると思います。これからも、この前向きな気持ちを維持し、個人的にも学問的にも進歩を追求し続けたいと思います。

また、海外留学を希望する学生たちが海外での生活や勉強に適応できるよう、アドバイスやサポートを提供し、より多くの学生の力になりたいと考えています。